
RPGヒロインという名のチート野郎。

菜智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPGヒロインという名のチート野郎。

【Nコード】

N5849Y

【作者名】

菜智

【あらすじ】

大人気RPGから飛び出してきたのは9割ツンの1割デレなチート過ぎるヒロイン。おまけに、飛び出てきた先には立派なニート。そのニートとチートヒロインがまさかの居候というベタな展開へ発展!?

主人公「…あー。頭いてえ。」

ヒロイン「風邪か？」
主人公「ちげえし…」

対処1・まず、自己紹介。んで、居候。

「神とのゲーム。それは気まぐれ？」

そのゲームは何処の会社の誰が作ったのかも分からない、まったくもって謎の多い人気RPGゲーム。

だが、その劇中に登場する主人公のヒロインが余りにもヲタクの心を鷲掴みにし、古い機種でありながら絶大なヲタク支持を受けている。

そのゲームを、例に漏れることなくしているのが俺、カミヤシユウ上南集である。だが、ゲームをしていると後ろから、自分しかない部屋の、自分の背後から。

『ほう。私はこうして動いているのか。中々、面白い。』

思いつ切り大人びた声がするものだから、後ろを恐る恐る振り返ってみれば

『ん？どうした。私に構わずゲームを進めてくれ。私もこのように見るのは初めてでな。』

見た目そのまんま、今、俺がしているゲームの大人気ヒロインがいた。

「……」

取り敢えず、後ろのく誰か>は無視してゲームを進めていく。が

『ほうほう。』

だとか

『このダンジョンはこうなっているのか……。いやはや、興味深い。』

とかずつと言われていれば気にならない筈はなく。俺は一回セーブをすると、メニュー画面にして再度後ろを向いた。く誰か>はいつの間にか我がもの顔で俺の後ろにあるベッドで寛いでいた。

『あ！何故止めた！？私は見たいと言うに……。』

「ちよつと待て。」

見るからに、ザ・ファンタジーな服に寄ったシワを伸ばしているく
誰か>を見ていると

『全く……。どうしてこうシワが出来るのか……』

いや、普通ですから。それ。

『おい、お前。早くゲームを再開しろ。私は見たいんだ。』

この大人気RPGヒロインを支持しているヲタクからしたら、きつ
とこの性格は……。どうなのだろう。

「あの、さ。貴方は、誰ですか」

『私か？私はお前のしているゲームのヒロイン。名前は、ナツメ。
俺は心の中で盛大に溜息を付く。もちろん、表には出さないが。』

「で、そのゲームのヒロイン様が何故俺の、一プレイヤーである俺
の所にいるんですか？」

『さあ。それは私の預かり知る事柄ではない。』

いやいや、そんな事をどや顔で言われても。どうしろと？

『ここに出てきたのは、私自身の意思では無いからな。』

「じゃあ、誰の意思？」

『……………え、と。』

自称ヒロイン・ナツメは少ししょんぼりとしたような、少し言いつ
らいような顔をした。

『……………ゲームの、ボス。』

そんな顔を急に赤らめてぼそぼそと言われて、ときめかない男など
いないはずはなく。

「……はあ。」

だが、そんな現実からぶっ飛んだ事を受け入れる脳など生憎、俺に
は備わっていないかった。

『ごほん。……………とにかく、だ。これから暫くの間、ここで世話にな
る。』

「……………は？」

俺はナツメの言葉を聞き返した。今、なんて言った。

「あのさ。ゲームの中に戻ってくれますか？」

『無理だ。戻れる場所はゲームの何処かのダンジョンらしいからな』

「…つまり、そのダンジョンを見つけないと戻れないと？」

あー。頭痛い。遂に、自宅警備員丸三年の俺にも幻覚が……。

『と、いう訳で。これからよろしく願います。な？』

につこりと笑うナツメの顔が若干怖く見えた。その笑顔の後ろに俺は武器を構える悪魔を見た。多分。

…これは、面倒見なきゃいけないんだろぅなあ……。

これから起こるであろう様々な問題（大体は友達が関係するが）頭が回りそうだ。

…取り敢えず、俺はこのナツメとやらをゲームの中に戻す為にゲームを再開した。

……後ろを気にしないように。

対処2・チートは現実でもチートww

前回までの振り返り。

大人気RPGから飛び出して来たヒロイン様はかなりのツンが多いヒロインでした。おまけに、ちよつとの天然。

そんなツンツンデレ少女とチートヒロインチートヒロインの自宅警備員丸三年の居候物語。りっぱなチート

ナツメのちよつと機械じみた声にも慣れ、サクサクとまではいかないがそれなりにゲームを進めていた頃。

俺の胃が空腹の抗議の声を上げた。時間を見れば、大体3時ぐらい（暗くてそれ以上は見えない）だろう。

そろそろゲームへの集中力も切れてきたため、俺は冷蔵庫から晩ご飯の残りを取り出すと後ろで眠っているナツメを起こさないようにご飯を食べた。意外と減っていたのか、胃がもっともっとと食べ物求めてくる。

気づけば残り物はなくなっていたが胃はまだ足りないと言わんばかりに抗議の音を鳴らし続ける。

ぐう。
うん。腹減ってるなあ、俺の胃よ。まだ足りていないんだろう？分かってるさ

ぐうう。
だが、それは鳴りすぎだろう。

自分の腹の音ではない音が俺の後ろで唸る。さあ、落ち着こう。そして、振り向くんだ。

振り向けば寝惚け眼のナツメが恨めしそうにこちらを見ているではないか。

「……狡い。」

「…は？」

「ご飯……狡い。私はまだ食べていないぞ。」

ああ、あの時にバッチリ起きて見ていたと。取り敢えず俺はナツメの機嫌をこれ以上損ねない為に、冷蔵庫に行って何か食べる物を探したが……生憎と無かった。

「……無い、のか？」

「ああ、さっぱり全くだ。明日になればネットで頼んでいたのが届くから明日まで我慢し」

「じゃあ、外に買いに行くぞ。」

…は？今、自宅警備員にとつての禁句が出てきたが。

「下には、コンビニエンスストア、があるのだろう？」

「買いに行け、と？」

「そこまで私は鬼畜ではない。私もついて行つてやる。」

あくまでも傲慢ツンの態度は崩さない。ここまでいくともう清々しい。

だが、ここで折れてしまつては自宅警備員ニートの名折れ。俺は若干強く「俺は外へは出ない。行きたいなら場所を教えるから行つてくれば？」

「…我を通すつもりか。私に対して。…いい度胸だ」

ナツメは口を手で押さえて小さく、くつくつく、と笑った。そしていつもの傲慢な微笑みで。

「なら、私が連れ出してやろう。お前の意思とは関係なく、な。」

「何言つて」

ナツメは俺の言葉を無視して。

「シュンフウ
迅風」

その言葉が聞こえてからほんの一瞬だけ、目の前が真っ暗になりナツメの声だけが聞こえてくる。

「どうだ？私の魔法は」

目を開ければそこにはよく見知っているコンビニ<7時11時>があった。

「……は？」

「私が魔法を使ってここまでワープ、転移してきた」

「魔法って……！？ここは現実世界だろ！」

そう反論した俺にナツメは特に悪びれる事もなくさらりと。

「私には現実も何もない。私にはただ、魔法を使えるという事実があるだけだ。」

そんな言葉に俺は言い返す気力もなく、ただ項垂れた。

こうして、俺の自宅警備員生活は三年という短い期間で終わってしまった。

対処2・チートは現実でもチートww（後書き）

はあじめまして！今回はちょっと嗜好を変えてコメディっぽいお話です（、・・・）

ゲームのチートヒロインが暴れますwwでも、ちょっとシリアス投入してみたりw

ちなみに。私は最近（ちょっと前かな？）シリーズ15周年を迎えた某シリーズが大好きです。7 5さんのね（、・・・*）

対処3・ゲームの戦いは現実では結構なハードww

前回までのあらすじ。

ツン…もとい、傲慢^{ツン}デレなヒロイン様の現実丸無視の魔法によって俺の自宅警備員生活は呆気なく終わってしまった。…なんだかなあ。

コンビニ<7時11時>である程度のご飯（勿論ナツメの分も込みで）をどっさりと買い込む。

その中にはご飯…なのか食玩やら期間限定のお菓子やらも入っている。財布が悲しい…。

「早く帰るぞ。」

そんな俺の気も知らずに、ナツメは幼い子供のようにニコニコと微笑む。口調は何ら変わっていないが。

「…はあ。はいはい。了解しましたと。」

俺はどっさりと入ったビニル袋を持ち上げると、ナツメが怪訝な顔で辺りを見回している。

「どした…？早く帰るんじゃない？静かに」

ナツメは何時もとは違う声で俺の言葉を遮った。その只ならない雰囲気^{雰囲気}に俺は黙り込むしかなかった。

「…先に帰っている。私の分は取るんじゃないぞ？取ったら、分かっているよな…ん？」

ナツメは俺にそう言うと、足早に帰る方向とは逆の…俺が子供の頃によく行っていた公園へと走っていった。

俺は何かを感じつつも、ナツメのあの雰囲気^{雰囲気}を再び思い出してそのまま帰路を歩き始めた。

集が完全に去った事を確認して、ナツメは公園に続く並木道の木々に語りかける。

「さて、どうした…。私に何か言伝たい事柄でも？」

『いいえ。単に私が興味を持っただけです。ゲームでしか存在しない架空の者が生きている様子に。』

並木の木々から響くような声が反響してナツメの耳に届く。

「姿は見せてくれないのか？私はいつかりと相手を見ないと話せない性格なのでな。」

ナツメは楽しいかのように微笑んだ。その笑みは酷く美しく、妖艶。『貴方の頼みは断れませんからねえ……。＜あの方＞からの命令もあります。』

木々が風も吹いていないのにざわざわと靡き始める。空は清々しいほどの黒と青の相まつた見事な景色だが、それとは反対に空気は緊張していた。

「腕試し、というものか？…いいぞ。来いよ」

靡いていた木々の木の葉が散り、一斉にナツメ目掛けて飛来する。

だが、ナツメはそれに何の興味も示さない。

ただ、先のように妖艶な笑みで。

「^{スィオウ}水槍」

ナツメに飛来していた木の葉…刃ほどの強度まで強化されていた木の葉が宙でピタリ、と動きを止めた。

ナツメの後ろに仁王立ちするのは水で創られた龍。そしてその頭上で次々に展開されていく同じく水で創られた流星群。木の葉は水に圧倒され、次第に数を減らしていく。

『……ははっ…』

唐突に、声が笑った。その笑いに同調するように木の葉は数を増やして、ナツメに襲いかかってくる。

ナツメはまた水龍に命じて、木の葉を水の流星群で打ち消していくと、ナツメはある事に気が付いた。何枚かの木の葉がナツメの後ろ、そして、水龍の後ろを通り抜けていく。

先の声が発した唐突の笑い声と、今の木の葉の動きから推測される答えはたった一つ。

（後ろに私が動揺するものがある……っ！！）

ナツメは後ろを向かずに、直ぐ様もう一つの魔法を作動させる。

「っ影身！^{ウツシミ}」

ナツメの影を借りて創られたもう一人のナツメは本体であるナツメの意思を受けて、直ぐ様後ろへと瞬間で移動するとナツメが動揺するものゝを木の葉の刃から守るためにナツメの力を受けて魔法を発動する。

「^{ケンカ}護花」

影のナツメとナツメが動揺するものゝに覆いかぶさるように、大きな睡蓮の花が現れる。

「全く。私は帰っていると、言っていたはずだが」

ナツメの口調はしっかりと怒っていた。しかし、その表情は驚く程に穏やかに微笑んでいた。

「…ははっ。まあ、ヒロインが戦うのを見るのも悪くないかな。」

その表情に少しは驚きながら、集は言い返した。ナツメは小さく、誰にも聞こえない声で

「馬鹿。」

対処3 ゲームの戦いは現実では結構なハードww(後書き)

…戦闘シーン楽しかったです。多分一番早いペースで戦闘シーンは書いていたと思いますww

対処4・チート戦闘終了のお知らせ。

前回までのあらすじ。

取り敢えず、ゲームの戦闘が現実世界でも起こっている…としか、言えない。

「さて、と。もうこれで終わりか？」

ナツメの勝ち誇る顔が集の脳裏に浮かび上がる。

『……秘欺。^{ヒメキ}』

声の響きが薄れていくと共に、木の葉はただの葉っぱとして地に落ちていく。代わりに、並木から姿を現したのはゆらゆらと陽炎のように揺らいでいる影。しかし、それはしっかりと歩みをナツメに進めていく。

「バックアップシステム、作動。リンク、オールグリーン。」

影のくナツメも後ろの集を護りの花“護花”^{ケンカ}に包み込ませたまま、ナツメの隣りに寄り添うように立ち、言葉を二人で紡ぐ。

それが集にはゲームで一度だけ見たことのある技に見えた。

『…言の葉の紡ぎし、彼方に消えた夢幻よ。ここに。』

二人の間からちらちらと溢れていく光の欠片が次第に大きな鳳凰を創り。

『其方は我と共に、照らす光と在れ。』

形作られていく鳳凰は大きく翼を広げ。舞い踊る光の欠片は桜の花弁を模していく。

『^{フライングデウスング}
誉の翼』

鳳凰の清く滑らかな咆哮が周囲に優しく響きわたる。

「お前の技…秘欺^{ヒメキ}は、一度に己の分身を大量に発生させる。そして、一体ずつで倒しても直ぐに分身はまた現れる。…私の影身の量産系^{ワッペンミ}か？」

桜の花弁となった光は先の木の葉のように鋭い刃のような特性を持

っ。

「でも、一度に倒してしまえば何の問題にもならない。」

……ふあ、さ……ざああああああ……

光の刃が鳳凰の羽の羽撃きによって、刃となった花卉は次々に影を撃ち抜き数を減らしていく。

だが、その中でナツメは小さな違い…異変に気付いた。

撃ち抜かれていく影の残滓が次第に一つの影に集まっていくな。

その影は大勢の影よりもかなり後ろの方…まるで指揮官であるかのように立っていた。

（つまり、あれが本体…！）

ナツメは、鳳凰の動きを止めるとその影へと微笑んだ。

「全く出てこないからいつもの影かと思っていたが…そうではなかったな。」

影は口をニヤリ、と歪ませて

『流石は“^{チート}神力”の名を冠するだけあって見破られましたか…いやはや残念。』

影の漆黒の黒が糸のように解けていく。その後、現れたのは白髪を腰にまで靡かせている中性的な顔立ち、体をした、しかし男性。

「久しいな。いや、ゲームでは一回のイベント戦闘でしか会っていないかアサギ・リヴェリアス」

『確かに。しかも私は影を通してでしか見ていませんものねえ。ナツメ・イウエ・リステイアート。』

二人は和やかな微笑みで。…互いに火花を散らして。

「で。お前が来たということは何かは預かっているのだろう？でなければ、お前が興味本位でこんな所に来る筈がない。あいつは何て？」

男性…アサギは先の微笑みから一転、表情が一変した。何も感じない無表情へと。

『後、三日。それまでに、全てを断ち切るか…自らく絆を壊してくるか。』

ナツメの顔に亀裂がはしる。だが、アサギはそのまま静かに礼をする
と霧のように霧散して消えた。

“護花^{ケンカ}”が消えて集はナツメの所へと向かって、その表情を見て驚
いた。

「……あ。どうした？」

ナツメの表情は何かを恐れているような、それでもそれは直ぐにい
つもの傲慢な微笑みに戻っていた。

「何を言われたんだ？」

「……知りたいか？」

ナツメは自分の影身^{ワッシミ}を戻すと少し迷ってから。

「ゲームの中に戻る方法がある、と……」

「良かったな！」

集の余りにも嬉しそうな反応にナツメは少し（いやかなり）ムツと
した顔で、尚且つ明白に機嫌悪い声で。

「嬉しそうだなあ……。まあ、いい。帰るぞ。」

さっさと歩くナツメに集は慌てて追いかけた。

結論

チートキャラ同士の戦闘は見る分は楽しいが、巻き込まれると結構
……見応えはあるが同時に生命の危険もある。爆風とかばないw

対処5・チートのご機嫌ナツメ。

あれから…現実世界で起こったチート同士の戦いの後から、ナツメの様子はどうもおかしかった。

いつも何処か上の空で、俺を見て溜息をついたり…今までに無かった事が。

「ナツメ。お前、どうしたんだ？あの戦いの後から様子が変わだぞ。」

「ああ。気にするな…。別にお前に何か迷惑をかけるでもなし、これは私個人の問題だから、な」

そう言っただけでまた上の空。こうなってしまうてはこっちの調子も狂ってしまう訳で。

まあ、当然、ゲームも進められないと。

「お前、何悩んでるんだよ。ゲームの中に戻れるんだろ？」

緩々とナツメは首をこっちに向けた。よく見れば目の下にはうつすらと隈が出来ていて。

「…そんなに私が帰る事が嬉しいのか。」

「え？そりゃあ…だっただけでお前の生まれた場所だろ？帰りたいとは思わないのか？」

「…生まれた場所…か。」

ナツメは自嘲するような微笑みを浮かべて、それをまた直ぐに消した。そんな表情を見たことが無いから俺は何か問題でもあるのか、と思っただけ以上は聞かなかった。

…聞くことが出来なかった。

「さて、少し消える。結構居なくなると思うが…気にするな。」

ナツメは何も考えていないかのような顔で俺にそう言う。

「…もし、私が本当に消えたら、どうする？」

そんな質問が唐突にナツメから聞こえた。俺は直ぐに答える事が出来ず、考えている間にナツメは光となつて消えてしまった。多分、あの魔法…シュンブウ迅風を使ったのだろう…僅かなそよ風が部屋を駆けて消

えた。

一陣の風が何処かの病院の何処かの病室にそよ風として舞う。風の後にはナツメが立っていた。

ナツメの視線の先にはベットに横たわり、眠っている少女。触れてしまえば脆く崩れてしまいそうなほど儚く見える少女は辛うじて生きている。聞こえない程の寢息で。

「……このままだったら、良かった……？」

一人、ぽつり、と呟いても応えてくれる人は誰もいない。

「分かんないよね。うん……分かってる。だって」

白すぎる病室に新たな風が舞い踊る。ナツメは少女の頬にそっと触れた。

肌色も見えない程の肌の色。生きているのかも分からない冷たさ。

まるで、それは人形。

「……いつまで続くのかな」

“いつまで？私が飽きるまで。”

何処からか響く声はアサギのような中生的な声ではなく、しっかりとした意思を持ったしかし何処か気の抜けた声。

“いやいや。全く予想外だな。君の性格ならさっさと言っていると思っていたのに。残念”

「お前……いつからここだと分かった？ここが私の……」

“さあ？でも僕にとってはそんな事はどうでもいいんだ。”

“君という玩具おもちゃが中々帰ってこないからさあ、僕、暇人なんだよね”

「知らないな。お前の都合なんて」

“んー。でもここでの君も結構面白いからさあ……。もう少し鑑賞させてもらおうかな？”

「……はっ。私を野放しにしておくとはな。面白い」
声はくすくすと、子供のように笑った。

“後二日。それだけ経ったら僕は君とお君の近くに居る人へとびきの贈り物をしてあげる。”

「……消える。」

“うん。そろそろ戻らなくちゃいけないからねえ。それじゃあねえ”

声は耳に響くままに消える。残されたのはまた静寂。

「……私、は」
呟きに応えてくれる者も、いない。

対処 5・5・ゲーム話 (前書き)

今回は本編ではありません。ちょっとした息抜き用の話ですので気楽に見てもらえれば良いと思います。中身はギャグっぽい(?)です

対処5・5・ゲーム話

「さて、今回はいつもの話とは違って…ちょっとした息抜きで読んでもらえると私は嬉しい限りだ。」

「あのさ…ナツメ。せめて何をするのか位は喋れって。あー、えと…すみません」

集がペコペコと頭を下げる。

「今回は私がヒロインを務める大人気RPGゲームのあらすじを紹介しようと思っている。」

「大人気って自分で言うか普通…」

「何か言ったか？ん？」

ナツメの極上の微笑みは実はかなり怒っている証拠だったりww

「はあ…さて、それじゃあ紹介しますか。余り文字数ももらっていないからな」

「文字数など関係ない。いざとなったら私が作者に攻撃魔法をぶっぱなして（ry

暗転（只今、集が必死にナツメを説得しています。暫しお待ちください。）

「…それでは、あらすじをご覧ください。」

静かな音がいつも世界中に奏でられる世界・オリシア。その奏でられる清らかな音が消えた時、世界に光では決して照らされる事の無い漆黒の闇に包まれていく……。

その時、誰かが願った。否、誰かではない。世界中の皆が願った。

<どうか、この救われぬ漆黒の闇をも照らす優しく、清らかな真光^{ヒカリ}を…。>

その願いが誰に届いたのか、それは誰にも分からない。そして、願いは成就された。

世界の何処か、誰も知らない、世界すらも知らない、近くて遠い場所^{ヒカリ}で生まれ堕ちた存在を誰からも祝福されず、神にも見離された清らかな真光。

その名は、ナツメ。幻の透き通る桜に誘われた者。

人々の数え切れない程の願いを、己に生まれてから身に封じられていた記憶と過去を背負って。

そして、たどり着く。闇の主へと…自分と同じく誰からも祝福されなかった者へ、ナツメは問う。

「ねえ…」

「

（こうしてあらずじをしつかりと見るとナツメがナツメっぽくないなあ…。何というか）

「こうしてあらずじをしつかりと見るとナツメがナツメっぽくないなあ…。とか思っていないだろうな？」

「……………（；^ ^）」

「よし、お前。そこから逃げるなよ？」

ナツメが何故かメリケンサック装備で近付いてくる。こうなれば、手段は一つ。

「……………俺、生命は大事にする奴だから！ 〃 〃ゞ（；。°。）」

／

集は逃げた！しかしナツメに囲まれた！！

「ふ、ふふふ。逃げられると思うなよ……………？」

暗転

「それでは、また本編で会おう。」

「ま、また本編で頑張ります（ry」
がくり、と集の頭が落ちた。

対処 6・新たな波乱はやはりアイツが持ってきたw

「んう……ふう。」

ごろり、と俺のベッドでナツメが寝返りを打つ。只今、朝の6時を過ぎたところです。

先に言っておこう。俺は変態ではないという事を。

「…は、ん。」

確かにナツメの寝顔はしっかりと見てはいるが、それは不可抗力の結果であって…。えっと、今の俺の姿勢は…、ナツメに腕を掴まれて（もんのすごい力で）ベッドにダイブ。離れようにも力が強すぎて離れられないという

（何の漫画だよ…。このベッタベタな展開は）

「…ん。」

またごろり、と寝返りを打った瞬間俺の心臓は許容範囲を軽く超えた。ナツメの顔が、とにかく近い。

互いの寝息がかかる程に顔が迫ってきている。おまけに、ナツメのいつもより緩んだ顔もかなりのレアな訳で。そんなチャンスの時に離れるなどという愚かしい事をする事など言語道断。

ばくばく、と鳴り響いて仕方がない心臓を無視して俺はその姿勢を維持し続けた。

…後にこの行為が仇になるとは分からずに。

「…信じられない。お前、一回マジで死ぬか？」

「だから、ごめんて。」

あの後、起きたナツメにこてんぱにされたのち…ゲームを再開した。もちろん、盛大なビンタORキックを見舞われた訳だけれど。ビンタの痛みが中々引いていかないなか、唐突にインターホンが鳴る。

「はぁーい」

がチャリと扉を開けても、誰もいない。

「ピンポンダッシュか？」

「ピンポンダッシュじゃなかねえ！」

下を見下ろせば、そこにはぶかぶかのローブを着たちっさい女の子。服装の模様から察するに…。

「ナツメに何か用か？」

「其方、姉様を知っているのですか？」

あー、うん。このぶっ飛んだ感じはあいつの知り合いだな。

「ユサギ…？どうしてここに」

ナツメがノロノロと奥から顔を出す。女の子（ナツメが言うにはユサギ）が嬉しそうに手をぶんぶん振る。

「姉様ー。ユサギ、ここまで来たんだあ。すっごいでそあ？」

「ナツメ…この人は？」

「ああ、私の妹のユサギ・イヌエ・オーファだ。」

ナツメがユサギに中に入ってくるように手招きをする。ユサギは靴を脱いで入っていく。一応、俺の部屋ですが？

「姉様。そろそろお家に戻ってくらさいい！あたしだけじゃ、お家を維持し続けるのはもう無理ですうお！」

「そうは言っても…。私はここが気に入ってる。だからここからは出ない。」

ユサギは、むう、と大きく頬を膨らまして手をバタバタと振って叫ぶ。

「早くしないとくあの人>は怒っちゃうし、兄様だて維持出来ないんですうー！」

ナツメは観念したかのように深く溜息をつく。

…ああ、やっとこれで俺の自宅警備員生活がカムバックしてくる…。

「そこまで言うのなら、お前が私をここから引っ張り出して連れて帰れ。」

「……はあ？」

俺は呆れたような、驚いたような声を出す。ここは俺の部屋だって

えの。

「分かりました!!」

おい。俺を置いて話を進めるなし。

「私が姉様を無事、連れて帰ります!!」

あー。やっぱり、こうなっちゃうのね。

俺は二人の勝手な話に意識を遠くして、考えた。

きっと、俺の自宅警備員生活のサイクルが戻ってくるのはかなりの先だろうと。

対処7・タイムリミットとデジャヴww

あれからユサギ含めての俺の生活が始まった。

あれから変わったことと言えば、ユサギとナツメが何処かへと出かけていく事が格段に増えた。

「俺としては嬉しい限りなんだけど……なあ。」

最近ナツメが居続けた影響からなのか、一人がとても静かに感じる。ただ、ゲームの音だけが部屋に流れ続けた。あ、レベルが上がった。

部屋の近くの公園の並木道をナツメとユサギは二人で歩く。正確には、ユサギがナツメの後を追いかけるといった感じだが。

「姉様ー。本当にお願いでうから、戻ってくらさい!!」

「嫌だといったら嫌だ。お前もいい加減懲りろ。」

「あねさまあ……。」

ユサギが頼りない声を出す。

「後三日したらくあの人>が贈り物するって言ってるけど、っ絶対怒ってますって!!姉様も、あの人も滅茶苦茶にされちゃいますって!!」

ぴたり、とナツメの歩みが止まる。すかさず、ユサギが追い打ちをかけていく。

「それに!姉様の目的は果たせたのでしょっ!?!ならば早くお戻り下さい!」

「ユサギ。」

ナツメの声には怒気が含まれていた。

「姉様……。兄様がどうなっても、いいのですか!?!」

ユサギの足音が遠ざかる。

「分かつてる。それでも、私は…ここに…」

“贈り物を”

「贈り物…。」

ナツメの頬を冷たい風が通り抜ける。

何時までここにいられるかは、ナツメにも分からない。

ただ、時間がくあの人>が許す限り…ここに居たいと、ナツメは思う。

がチャリ、とドアが開く音がした。きつと、ナツメとユサギが帰ってきたのかと思って覗けば顔をムスッとさせたユサギ一人だった。

「ナツメは？一緒じゃないのか？」

「姉様なら一人で歩いてくるって言いました！」

ユサギはベッドにダイブするとブツブツと一人で呟く。

「大体、姉様が居ないと兄様だって維持することは難しいのに…。姉様でば、ここでの生活が<名残惜しい>のではないのでしょうか…。でも早く帰還しないと<あの人>は特大の爆弾を落とすつもりでしょうしい…！」

「ナツメをどうしてもゲームの中に戻したいんだな。」

ユサギは驚いたように俺の方を見るが、今までの呟きを聞いていれば誰だつて分かる。どれだけナツメを心配しているかを。

「姉様が居なければ兄様だって……」

「心配しているのか？その、お兄さんもナツメの事を」

「ええ……まあ」

ちらり、とユサギはカレンダーを見る。

皆様には言い忘れていたが、今は12月の29日。後2日で年が終わり、新たな年が始める。

「後2日以内に戻らなければ、盛大に怒られてしまうのですう！」

「怒られるって、誰に？」

「ええと、それは……のおこめんと、というモノを使わせてもらうのですあ。」

ユサギは少し気が紛れたのか、帰ってきたときよりもニコニコと笑顔を零すようになっていた。言葉遣いも戻ってきてしまったが。

「それに兄様だって……姉様が居なければ……。」

「さっきから兄様兄様って言うけどさ、何か事情でもあるのか？」

「…ゲームで、兄様を出現させる方法はご存知ですか？」

ナツメの、ヒロインの兄がゲーム内に居るなどそれまで一回も聞いたことがない。自他共にゲームヲタクである俺さえも。

「どんな条件なんだ？」

ユサギは、にま、と笑うと

「それは内緒れす！それに、時が満ちれば、分かりますよ。」

そう言くと、ユサギはベッドに突っ伏した。そのまま数分後には寝息まで聞こえてきた。全く、子供らしいというか何というか。

さらり、とユサギの髪が俺の手に一房落ちる。その感触は正に人間そのもの。とても、ゲームのキャラクターには見えない。

「ふみゆ。……にゅ……」

ごろり、と体勢が変わり顔が俺の方に向く。余りにも可愛らしいその寝顔に顔が綻ぶ。

だが、俺はこの時点で気付くべきだったのだ。

「……………この」

これが、デジャヴだということに。

「つつつ変態」

ああ、意識が飛んでいく5秒前。

「があああ——————！！！！」

がす。鈍い音がする。

俺の意識は5秒を待たずに飛んでいった。

対処8・短いしあわせ、解かれた矛盾

『きっと、必要としてくれる人はいる。こんなに広い世界なら。』
いつの記憶で、誰の記憶なのか。それは分からない。
でも。

『だから、全てを投げ出すような事だけは…やめる。それを約束。』
何もかもを失ってでも、その記憶だけは残したいと思った。
誰かと会話した誰かの記憶を。

「…さむ。」

朝の寒さにナツメはノロノロと瞳を開けた。見れば、集はゲームをメニュー画面にしたまま微動だにしない。寝惚け眼で見れば。

「すう…すう。」

心地よい寝息をたてていた。ナツメは思わず微笑みを零す。

だが、そこで、はたと気付いた。自分にはやらなければならない事があると。

「まあ、半分は諦めたのに…ね。」

自嘲するように、ふ、と微笑む。ナツメは毛布をベッドから引きずり落とすと、起こさないようにそっとかける。

こつそりとゲーム画面のメニューを消すと、そこは何回か見たダンジョンだった。進んでいないのか、それともレベル上げのため来ているのかは集が眠っているため確認出来ないがその画面はナツメの不安を増殖させた。

（もう…。時間が…）

ウトウトと眠気がナツメにゆっくりと襲いかかる。

「ふあ…あ」

大きく欠伸をすると、もぞもぞとベッドに戻った。

「姉様ー。」

「嫌だと言ったら嫌だ。」

またいつものように、二人が口論…只の口喧嘩をしている。

「ナツメも一回は戻ってやれって。」

ナツメは暫しの間、こっちを見ていたが

「……分かった。」

やがて溜息をつく、妥協したように立ち上がった。

「姉様……!!」

ユサギの表情は何故か悲しそうな顔だった。

（あんなにも連れて帰りたがっていたのに？）

「と、言うわけで。」

ナツメがくるり、とこっちを見る。

「短い間、世話になったな。」

その顔は笑っていて、悲しげで。俺は思わず不安げになった。

何か、二人ともが戻りたくないかのように見えて。

「そんな不安な顔するな。どうせ直ぐに帰れるさ。それまで、精々

私を思い出して一人で泣いている。」

「誰がそんな事するか。」

ナツメは口に手を当てて、くすくす、と

とても楽しそうな笑顔を見せた。

「姉様。では…戻りましょうか。兄様の為にも」

ユサギがそう言って、部屋の外に出る。

「ここから、帰るんじゃないのか？」

「一応、私にも感慨に浸りたい時間は必要なんだよ。自宅警備員さ

ん？」

ナツメはまた笑うとそのまま、部屋を出ていった。

部屋を出て、並木道を二人は歩く。

「姉様…。本当によかったのですか？」

「何が？」

「あの人の事…。です。何も言わなかったのでしょうか…。今ならまだ」

「もういい。」

「姉様……！」

「もういいって……！」

ナツメが今までにない声で叫ぶ。その声に思わずユサギは体を強ばらせる。

「わたしはもう全て決めた。私一人で……終わらせる。」

決意したナツメを待っていたかのように体にノイズがはしり、

“ お帰りなさい ”

あの声が木霊する。

“ 全く、早々に決意してもらえて僕、嬉しいよ。 ”

「満足か？この結果は、お前の思う…観劇するに値するものだったか？こんな、こと」

ナツメの声がどんどん小さくなっていく。

“ んーと。正直に言っちゃうと、余り。もうちょっとアクションがあるかなあと思ってたのに…”

「残念だったな。ご期待に沿えなくて。」

“ だから…… ”

キン、とナツメの頭に痛みがはしる。その痛みと共に、解れて溶けていく、誰かの大切な記憶が。

「あ……え、え？」

解れていくなかで揺れて、波のように頭を駆けていく。

“もうちょっと……ね？”

「やめて……！姉様に酷い事は、しないで……！」
ユサギが手を握り締めて、叫ぶ。

“酷い事？違うよ？元に戻すだけなんだ。捻じれてしまった記憶を、ね？”

更に痛みは酷く、ナツメを苦しめる。

“いつつ、しょうたいむー。にやは”

ぼん、と空に音が鳴る。

見上げれば、そこには

「花、火……？」

ユサギが呆然と呟く。

そこには綺麗な、観る者全ての目を惹きつけるような花火が上がっていた。冬に有るはずのない。それと、同時に。痛みは増して、遂に。

「あ、がつ……！？」

頭の記憶が一斉に弾けた。

時同じくして。

集もまた、頭の痛みを感じて。
耐え切れずに、そのまま意識を手放した。
集の記憶が
ナツメの記憶が
解けて、溶けて。
始まる。

対処8・短いしあわせ、解かれた矛盾。（後書き）

次からはギャグというか、明るさはなりを潜めます。

どうしても話の核に触れる部分になってしまうので…。

でも、読みやすく！わかりやすく！をモットーに頑張っていきたいです。

因みに、本編でナツメがニートの事をくにと>と言ってるのはニートの事を本人が余り分かっていないからですw

対処9・り・すたーと。

暗い、暗い海に体がゆっくりと落ちていく。
でも、そのスピードは恐ろしく遅い。

違う、これは記憶。記憶が体のようになり、落ちていく。
何処まで落ちていくのかは分からない。

終わりの無い。何時までも続くそれは、まるで続き終わらない
あのゲームのよう。

「……ん？」

集が目を開けると、何もないいつもの部屋。だが、集はそこに大きな違和感を感じていた。何かがぽっかりと抜け落ちてしまったかのように。

ただ、古い機種のゲームのBGMが聞こえる。

「あれ、こんな事してたか？」

電源を切ろうと手を伸ばして、止めた。

このゲームに何かがある。自分の抜け落ちてしまった何かが。

「このゲームで、俺は何を……？」

「あー。やっぱり、でしたかあ。」

いつの間にかベッドに座っていた女の子は分かっているような微笑みで舌つ足らずな言葉で。

「お前は？」

「ああ……あたしの事も忘れてしまっとう？ 姉様の記憶と一回解して
しまった影響なのかあな？」

女の子はこて、と首を傾げると。

「私は、ユサギ。貴方の抜け落ちてしまった何かを全て知っている。」

集は思わず身を乗り出して、ユサギの肩を掴んだ。

少し、力が入ってぎりぎり肩が締まる。

「…いい、たつ。…痛いです。離してえ。」

「あ…、ごめん。」

「あ、と直ぐ様手を離す。ユサギはニコニコと笑うとゲームのコントローラを取った。」

「嘘ですよ？ 大体、私はゲームでの存在ですからあ痛み等感覚はありません。それよりも、私達の事と、貴方との関係をお話しまさう。」

ユサギの顔が一変、何も感情を映さない瞳になる。それはまるで、ゲームに出てくるNPC。その様子に、集は只、信じるしかなかった。

やがて、ゆっくりと落ちる感覚が消えていく。

地、なのか分からない。そこはとての柔らかくて地に足を付けているというよりも、浅めの沼に足を浸しているかのような…。

“ お帰りなさい。待っていた、ずっと。 ”

ああ、この声に私は何故か安心する。忌み嫌っていた筈のその声を。全てを奪って、私を閉じ込めた、この声に。

“ 君の願いは届かない。彼の記憶は全て解けてしまった。君の事も、短い間過ごしたあの頃も、彼の中には一つも残ってはいない。 ”

そう、私は只、あの人もう一度会いたくてこの場所から抜け出した。

私はとても傲慢だったけれど、それで、あの人を困らせたけれど、それでもあの人は笑っていて。

それだけで、もう良かった。例え、全てを忘れてしまおうがあの人

が笑顔でいてくれるのなら…満足。

“君は満足したのでしょうか？なら、次は僕の番。さあ、ゲームの続きをしよう？君が来るのを…、待っているよ？”

キャラじゃない事を言う、って笑ってくれるのだろうか？きっと、お前は。

自嘲するように笑って、私は呟いた。

「ログインする。強制シャットダウンを選択コマンドから消去。」

もし、もう一度会えるのなら
きっと、私は出来るかな？

元の私で。

「。。」

って言えるといい。

さあ、ゲームを始める。もう、あのころ現実には戻れない

対処10・ゲームログイン

「で、貴方はここまで聞いて何か質問はありますか？」

「……えっと。」

ユサギが全てを話終えて、集は溜息混じりに声を出した。

それもそのはず。ユサギの口から零れ出てきたのは普通には有り得ないような事ばかり。

（でも、信じられる話……でもある、のか？）

集はユサギの首をこてり、と傾げる様子に脱力して息抜きに、とコーヒーを持ってきた。二つのカップを持って。

一つはコーヒー。そしてもう一つはココア。

「ほら。取り敢えず、これでも飲んだら？ここに來てからずっと何も食べてないしさ。」

「……ふわぁ……。」

ふわりと立ち上る湯気から香るココアの甘い香りにユサギは……ユサギのお腹が、くう、と鳴る。

「飲んでいいよ。別に毒とか入っている訳でもないし。」

「……いいの、お？」

ユサギは暫しの間ココアをじっと見つめて、手に取ると

「…………ぷはぁ。」

一気に飲み干した。一応、温めの温度にしておいたため火傷する事はなかった。

「おいしかったのですうう……！」

「それは、どうも。」

「でも、いいのれすか？ここまでしてもらって……」

「いいよ、別に。色んな話を話してくれたお礼的な？まあ、気にしないでよ」

集は一口、コーヒーを嚥下するとユサギを見る。

「で、俺にして欲しい事は？」

「貴方の記憶を取り戻します。それが、貴方にとっても姉様にとっても大切な事だから。」

「その方法がゲームにある、と。」

「はい。ゲームの中のボスが全ての鍵を握っています。貴方も、彼女もくあの人>に絡まっている。」

ユサギはにつこりと笑うと、ココアの入っていたカップを両手で包み込む。

「私は、貴方になら姉様を……救ってもらえると思っています。」
そう言つて、何もないカップに口付ける。そこには、確かに新たな湯気が出ている。

「……え？」

「これが、ちいと神力キャラの真髄れす」
(それとこれは違うだろ)

集はその言葉を飲み込んだ。

「……それで、これからの事はわかりましたか？」

「まあ、一応は。理解は余り出来てないけれど。」

取り敢えず、これからの行動をユサギから聞いたが集はいまいち理解がおよんでいない。

「…習うあり、慣れるです」

ユサギは思い切り集の腕を掴むと

「口おグインしますう。尚、新たな玩具プレイヤーをお持ちしましたあ。同時に口おグインします」

集に有言わさずユサギは勝手にゲームログインを終えてしまった。

「これは、ログインとかの必要が無いゲームじゃないのか？」

「あい。でも、ゲームから出てきた私のようなキャラは戻る際にはログインという手順を踏めば戻る事は可能です」

「結構めんどくさいんだな」

「そう…でしゅね。でも、そうしてでも戻りたいんですよ。私達は

「…どんな危険を背負ってでも。＜あの人＞の怒りを買おうとも」

「……ふう、ん」

不意に見せたユサギのしつかりとした瞳に思わず、集は目を奪われる
「さて、と。そろそろログイン完了しちゃいますけど…いいんです
か？私は全て話しました。これからの行動が危険である事も、全て
それでも、行きますか？」

集は苦笑して。

「そもそも、俺が行きたくないと分かっていたら、半ば強制的にログ
インはしないだろ？」

「あは バレてえました？」

ユサギはにひ、と笑うと

「あ、そう言えば忘れてましたア？」

集の手の平に安っぽいペンダントを乗せた。それは、集の部屋の何
処かで埋まり、時間を無為に過ごしていた物。

「これが？」

「それを、姉様に会ったときに渡してください。それから、全ては
…記憶かんけいの修復は始まりますから。」

「…分かった。」

集はそれを壊さないように、そっとポケットの中にしまった。

ユサギはその様子にまた、へにやり、と歳相応の笑顔を浮かべる。

「うんうん やっぱり私の目に狂いはあ、無かったようですね」

ログイン完了。体のデータ分析開始。同時にデータ移行を開始し
ます。

（……あれ？）

集は今聞いたインフォメーションの声に僅かな疑問を感じた。

そして、ユサギを見る。だが、ユサギは

「…さつきから、私の事見すぎでえすお？」

あ！？私に気があるのか！？うーむ。困るにやあ…」

適当に誤魔化すように、顔を背けてしまった。

データ移行、終了します。

体にノイズが走る。それが合図だったのか、二人の体は完全に消えた。

対処10 ゲームログイン（後書き）

何か中途半端で終わってしまってますみません。

でも、この終は仕様なのでww書き忘れたとかでなないですよ？

対処11・ログイン終了かーのー？

「…わぷっ」

ゲームにログインして、体がノイズ化してすぐ、集は何か柔らかい物の上に落ちた。

続けて、ユサギも落ちてきた。ユサギは慣れているだろうと、集は思っていたが

「ひにゃあ!!」

集と同じくすつとんきょんな声で落ちてきた。だが、集とは違って場所の把握が直ぐに出来たらしく周りを見回すと、ぽんぽんとスカートを叩くと

「ここは、ゲームの中盤にある村：確か…。」

集は今だぐわんぐわんとする頭を押さえながら

「オートリアス、の事か？」

「そおそお!!そこまで一気に来んだよ。」

立ち上がり、周りを見渡せば、見るからにとてものどかな村の景色。まるでゲームの中に居る事を忘れてしまいそうなほどリアルに、暖かく出来ている。

「さて、ここからはどうするんだ？」

「貴方のゲームの進み具合からして、姉様はここに必ず立ち寄ります。」

「その…ナツメ、だっけか？そいつは自分の意思で動けるんだろ？だったらもう先に行っちゃってしまっているんじゃない？」

「そおれは無いですよ。あくまでも、姉様の行動はセーブポイントと、ゲームの…しなりお？…その範囲内でしか動けないんで。」

「えっと、つまり？」

「セーブポイントがある場所と、ゲームの進行で訪れる場所には必ず訪れる事がプレイヤーの原則ですから」

ある程度歩いていくと、宿屋の前に煌々と光る蒼色の球体があった。

「あれが、セーブポイント。だから、ここに姉様は訪れます！前にセーブを見た限りでも、ここの少し前のダンジョンからでしたからあ」

「あら、そこのお二人さん！」

二人が振り向くと、そこには恰幅の良いおばさん。

「ねえねえ、あんたたちは旅人かい？」

本当は違うのだが、集とユサギは一度おばさんに背を向けると

（どうする？）

（この際、旅人だと言ってしまった方があこれからの事も都合がいいのですお。）

「はい。」

ユサギが、につこり、と演技っぽい笑顔を振りまく。

「あ、あんた！もしかしてユサギ様かい！？」

「はい。どうですか、あれ以降のここは？」

「はい。おかげさまで…。それよりも、こっちの人は？」

「ああ。私の大切な人を救うために…。私の巫女です。」

「巫女様だったのですか！？いやはや、すみません。」

「いいえ。まだ新米ですのでそう思われても、無理はありません。」

…それと、敬語はなし、でお願い出来ますか？私は確かに“神力”

の力の加護を受けていますが、それを除けば私もただの人ですから。

「ユサギはふわりと笑う。」

（おお。すごい演技力）

集はその間、ユサギの演技に関心していた。

「良かったですね 確保が出来て。」

「まあ、な」

その日の夜。ユサギにお礼がしたい、と宿屋の店主だったおばさんが言つとユサギは

「でしたら、一日だけでいいのですが…宿に泊めてもらえませんか？生憎と今持ち合わせがありませんが…」

そう言つてうつすらと涙を浮かべたユサギに、おばさんノックアウト

そうして、今、タダで宿屋で休ませてもらっている所だ。

「やっぱり、ゲームの進行を蔑ろにしなくて良かったあ？」

「お前もやっぱりゲームのプレイヤーなのか？」

「え？どうして、ですか？」

ユサギの肩が、びくり、と跳ねる。

「だって、他の人のように決まりきった会話をするでもなし…普通に冗談も言っているし。」

「……あー。えっと。私は、姉様の補佐なので普通の人よりも感情豊かになるように設定されているのですよ！」

「一応、ゲームキャラだと？」

「あい。可笑しいですかー？」

ユサギは、びしっ、と手を上げる。

集はそれ以上突っ込んでも上手くはぐらかされる気がしたので、聞く事をやめてベッドに潜り込んだ。

ゲームの筈なのにリアルなベッドの柔らかい感触に、微かに香る柔軟剤のような香りに張っていた気が緩み、うとうと、と睡魔が襲いかかる。

それから完全に眠りに落ちるのに時間はかからなかった。

「……ふう。バレなくてよかった」

一人、暗闇の中でユサギが、ぼつり、と呟く。それを聞いているのは光を放つ月のみ。

「私は…うん、いいの。これで…。この道を、選んだから引き返せない。」

暗闇の中に浮かぶ表情は誰にも見えない。月すらも、その様子を伺

い知る事は出来ない。

「……ごめん。にい…さん」

「おはぁー」

次の日の朝。

ユサギはダイナミックに集の眠るベッドに飛びついた。案の定、集から

「ぐえっ」

押しつぶされたような声が聞こえる。

「お、起きた？朝だよ？今日は姉様と会わなくちゃいけないんだよ！？今日しか会えるチャンスは無いのぉ。」

「分かったか、ら……取り敢えず、どいて」

「ほい。んしょ」と

集は起き上がる。乗られた衝撃が効いているのか、肩やらなんやらが痛い。

「んで、何処にいけば…」

ガチャ、とドアが外側から開く。そこには
しつかりとした意思の宿る瞳。それは人とは明らかに違っていた。

「…姉様……？」

その場の空気が凍りついた。

対処11・ログイン終了かーらーのー？（後書き）

タイトルに深い意味はありません（；^ ^）
勢いで付けてみた。

対処12・ゲームの深淵へ！？

「姉様……？」

ユサギは恐る恐る名前を言う。

「……ユサギ。」

かつ、とヒールの音と共に近寄ってくる。名前の事を指摘しない辺りはその少女はナツメで間違いなかった。

「姉様……？一体どうしたんですか……」

「……ひゅ………」

ひやり、と集の喉元に冷たい物が死てがわれる。それを集は見ずに何かを把握した。

（剣………！？）

ユサギが思わずナツメに飛びつく。

「姉様！？やめて……！」

「……こいつは、誰だ。」

集を見下ろす冷たく、冷えきった瞳に集の背筋に冷や汗が伝う。ユサギの必死な様子に、ナツメは今だ冷えきった瞳を集に向けながら。「姉様……！剣を降ろしてください！」

「……分かった。」

「……ひゅ、ん………」

ナツメは剣をひと振りして、腰に付けた鞘に戻す。

ユサギは集に手を貸す。集はユサギの手を借りて立ち上がる。

「こいつは、誰だ。」

「この人は……集。……姉様？」

「お前。」

「俺の事か？」

「お前の名前は集というのか？」

「あ、うん…」

ナツメはそれを聞いた途端。

「…………ふわ。…」

柔らかい微笑みを浮かべた。その微笑みに集も思わず気が緩んでしまつた。

「姉様…？」

「あ、え…。どうした、ユサギ。」

「今、とても優しい笑顔をしていましたから」

ユサギの指摘にナツメの頬が見る見るうちに赤くなっていく。

その様子を微笑ましく見ていた集。やがて、ナツメは、わざとらしく

「こほん。」

と咳払いをすると集を見る。それは先までの冷たさは籠っておらず、寧ろ何か懐かしさが籠っていた。

「何だろうか。お前を見ていると何か懐かしく感じるな。今日会っ

た気がしない…集という名前も、何処かで…」

「なら、姉様は何故さつき剣を向けたんですか？」

「あれは…何か違和感というか…この世界とは違う者という感じがして、排除しなければいけないと思っていたんだ。それで、気付いたら…すまなかった」

ナツメが少し頭を下げる。

（あくまで、少しなんだな…）

「いや。気にしないでいいさ。急にこっちに来た俺も悪いんだから。」

ナツメがゆつくりと顔を上げた時。

「…………ああああ！！」

外から聞こえてきたのは、誰かの叫び声。ナツメとユサギは直ぐ様宿屋を飛び出す。集も続けて宿屋を出る。

「……うっ」

思わずむせ返ってしまう程の血の臭い。雲一つ無い青空の広がる朝には相応しくない臭いだった。

「こっちから、か」

その臭いは風にのっているようで、その元は村近くの森からだった。三人はそっちの方へ歩いていく。次第に血の臭いは濃くなり、森に入っすぐ血の跡も見つかり、三人の警戒は更に強まる。

やがて、広い場所に出る。そこが一番強く血の臭いがした。少し進むと、聞こえてくる音。

ぐちゅ……がり、ごりごり……ぼと

「……あ。」

こっちに向かつて投げられたのは、骨。それは、人の腕程の長さでべったりと血と何か透明な液が付いている。かなりの質量のあるそれは腕のようなもの以外にも広場に散らばっている。

足。腕。……そして。

「集。」

ナツメの声が集の意識を戻す。思わず凝視していたそれを隠すように、ナツメが立ち位置を直す。ユサギは素早く周りを見渡して、元凶を見つける。それは禍々しい漆黒と紅の混ざった色で、容姿は只の女の人。だが、手や足にはべったりと血の跡。

「……誰。」

『こんにちは。そっちの彼は、はじめまして。二人は久しぶり。』

流暢な言葉遣い。その声はナツメのようで、ユサギのようで。

「お前を私は知らない。」

すらり、と剣を抜いて構える。

『あら？私は何回も会っているのだけれど……。くすくす。』

「答える。お前は誰だ。」

その女性はうつすらと目を細めて、笑った。

『私は……。アサギ。』

対処13・デフォの戦い、結構過激な件について

「アサギ……？お前が、だと」

「はい。それについては、間違いありません。」

「アサギ、だという事は事実ですから。」

重なる女性の声。周りを見渡せば、既に何人もの同じ女性が立ち同じ言葉を発している。

「私達は彼女から生まれた分身。」
アサギ

「彼女の意思は私達の意思。」
アサギ

「アサギは、もしかして……。」

ユサギがぼつり、と呟く。

「貴方の推測する通りです。清らかなる道標。」

「でも、それを言う事は許さない。」

「彼女の意思を行動に。」
アサギ

「意思を行動に。」

ゆつくりとアサギ達が、三人に向かって歩を進めていく。

同じ言葉を口々にしながら。

「誰に目的が。私か？」

「それとも、私ですか？」

構えをそのままに、二人は目配せをし、警戒を強める。

「いいえ。違う。」

「私の意思は、違う。」

「貴方に用があるの。一緒に来て。」

す、とアサギ達と同じ人物を指さす。その先には、ユサギとナツメ、その二人に守られるようにいた集。

「あ…俺…？」

「貴方に、用があるの。貴方だけに。」

「それ以外はいらぬ。必要ない。」

「集に何の用がある。」

「大体、集さんはついさつきゲームにログインしてきたばかりなのに……どうして、<あの人>が知っているの!？」

『いいの。それは貴方達を知る必要は無いから。』

『貴方達はもう、おしまい。ここまで、この人を連れてきてくれてありがとう。と言っておくわ。』

少しずつアサギ達の言葉に間が生まれる。だが、歩は相変わらずのスピードで。

『ここから、は、私達が…連れていく。貴方、達……終わりに、なる』

「ユサギ、準備!！」

「はい!！」

そう言うと、ユサギは集の足元に陣を形成した。その陣は青々と光はらはら、と桜とも何とも判別出来ない花卉が舞い落ちる。

その似つかわしくない花卉の景色に、アサギ達は一瞬ながら気をとられる。その一瞬をユサギは、ナツメは見逃さなかった。

「オウカサミタレ“花卉月下”!！」

「っわあ!！」

舞い散っていた花卉が一斉に集の周りを取り囲み、小さなフィールドを形成して、そして消えた。

『隠した……。その人、渡して。』

『何処に、隠した。教えて。……私、た、が…怒る、前…に。』

「怒る前に。と言う前にもう怒ってますよね？」

ユサギが、くすくす、と笑い、手に鎖の付いた背丈以上の鎌を持つ。

「それに、私達が簡単に教える訳がない。分かっているだろう?」

ナツメが刀を軽く振り、挑戦的な笑みを浮かべる。

『私達、怒った……もう、いい……。全て、壊、す。』

『こ、わして…奪う!！」』

アサギ達が同時に陣を発生させる。そして、同時に走り出す。

「「そうでなくっちゃ。」」

二人の周りに、風が巻き起こる。

「ここ、は…？」

集は周りを見渡す。周りは暗闇で、ただ、陣を形成した時に舞っていた花弁がはらはら、と光を伴って空に踊っている。

「あの、^{ハナヒラ}花弁の中、なのか…？」

“はじめまして。^{カミヤ}上南君。…^{シユウ}集君、と言った方がいいのかな？”

暗闇に響く、幼い男の子のような女の子のような声。その声はまるで新しい玩具を見つけたような、喜びに満ちた声。

“あの^{アサギ}子達にはあの二人の相手をしてもらおうか。僕は君と話したいんだ。”

「俺はお前の事は知らないし、顔も見せないような相手とは話したくない。」

“…そういう所は相変わらず、だね。まあ、いいや。”

ぼう、と暗闇に灯る小さな光り。

“顔を見せたいんだけど…、生憎とく僕^{ぼく}達には顔が無いんだ。そもそもその固有名詞も無いんだけどね。だから…”

ぼう、と灯っていた光りに輪郭が現れる。そして

“これで、いいかな？ごめんね…。でも、感情は表すことは可能だから”

ゆらゆら、と揺れる光り。微かにその中には何かしらの感情も混ざっている…のだろう。

“さあ、話そうか？何からお話しようか？”

『…ん、ぐあ！！』

『い、たい…。また、死んだ！……5人…私^{アサギ}、死んだ。』

『許さ、ない…！私…怒る…。』

ひゅん、と鎌をひと振り。ユサギはそれでも、笑みを絶やさない。

「はーふう。疲れたあ…。」

ひゅん、と刀をひと振り。ナツメはそれでも、笑みを絶やさない。

「ふ、この程度で疲れるのか？彼方^{ゲンジツ}の方に長く滞在しすぎたか？」

「姉様こそ、彼方^{ゲンジツ}に居すぎたせいで口調がヒロインじゃなくなってますよあ？」

「…そんなに言える気力があるのなら、まだ、いけるよな？」

「あつたりまえです！！」

『…あは、ははは。』

『…あはは、はは。』

『…あははは、は。』

アサギたちが次々に笑う。妖艶に、不気味に。

「なんだ…？」

「分からないです…。でも、何か危険な感じがします。」

「用心するに越したことはないか…。」

ふおん、と二人の下に陣が形成される。そして、二人に絡み付くように鎖が腕に、足に。

『あ、はははははははは…。』

『あはは。分かった、伝わった。』

『彼女^{アサギ}の意思、伝わった。』

アサギ達の狂ったような笑いが、森中に木霊する。
響きわたる声に、二人は背筋に冷や汗が伝わるのを感じた。

対処13 デフォの戦い、結構過激な件について。（後書き）

最初のタイトルにデフォと付いているのは、ゲーム画面で見たら、全てのキャラがデフォされた状態だからですww
だから、本編で頑張って戦闘してもゲーム画面ではちっこいのが
わらわら戦っているようにしか見えないww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5849y/>

RPGヒロインという名のチート野郎。

2011年12月5日19時04分発行